

【書評】

グローバルな連帯における宗教の可能性

——ロバート・N. ベラー・島蘭進・奥村隆編『宗教とグローバル市民社会 ロバート・ベラーとの対話』岩波書店、230pp、2014年、2800円＋税、ISBN: 978-4-00-025975-0

千葉大学大学院人文社会科学研究所公共研究専攻 博士前期課程1年
星川 竜之介

はじめに

本書の構成

本書はアメリカの宗教社会学者ロバート・N. ベラーが2011年に来日した際に行った講演・シンポジウム、その後ドイツで行った講演の記録に、招聘に関わった宮島喬、奥村隆、中島隆博、島蘭進の論考を加えたものである。本書は全5章からなっており、主にグローバル市民社会における世界市民宗教の役割について論じられたI章、人類進化と宗教との関係について論じられたII・V章、丸山眞男の比較ファシズム論を中心としたIV章、以上の領域を横断するように議論がかわされたシンポジウムの記録III章という構成である。

以下、本書評においては本書におけるベラーの議論を中心に紹介し、最後に評者の若干のコメントを付して結びとした。

【目次】

序文 ロバート・N. ベラー（奥村隆訳）

編者まえがき

I グローバルな市民社会と市民宗教の可能性（ロバート・N. ベラー、
松村圭一郎訳）

世界市民宗教はいかに可能か（宮島喬）

II 進化・遊び・宗教——人類進化における宗教について（ロバート・
N. ベラー、奥村隆・後藤孝太訳）

ベラー VS. ベラー ——宗教をめぐるふたつの視点（奥村隆）

- Ⅲ [シンポジウム] ファンタジーの世界に閉じこもってはいけない
——環境危機と国際政治, そして人類の課題

問題提起: ロバート・N. ベラー／コメント: 古矢旬、大澤真幸、
ミラ・ゾンターク／進行: 奥村隆、生井英考

- Ⅳ 丸山眞男の比較ファシズム論 (ロバート・N. ベラー、中島隆博訳)
日本はどこにいるのか (中島隆博)

- Ⅴ 人類進化における宗教 (ロバート・N. ベラー、中村圭志訳)
「進化」と超越界の自立性 ——ロバート・ベラーの宗教論の到達
地点 (島蘭進)

ロバート・ベラーの略歴と業績

本書評をはじめの前に、まずはベラーの略歴と主要業績を紹介しておこう。ロバート・ニーリー・ベラー (Robert Neelly Bellah) は1927年にアメリカで生まれ、ハーバード大学でタルコット・パーソンズに社会学を学んだ人物であり、一般に宗教社会学者と見なされている。ベラーは日本文化の研究者として出発しており、博士論文 *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan* (1957年) は後に岩波文庫から『徳川時代の宗教』(1996年)として出版されている。この論文に対して丸山眞男は長大な書評を書いており、ベラーはこれをきっかけとして丸山と深い交流を結んだ人物でもあった。博士論文を書き上げた後はハーバード大学、そしてカリフォルニア大学バークレー校で学者として活躍し、主にはアメリカ社会の研究でその名を知られるようになった。論文「アメリカの市民宗教 Civil Religion in America」(1967年)では市民宗教論といわれる領域を新たに開拓し、それに続く『破られた契約 *The Broken Covenant*』(1975年)や、グループ研究の成果として共著『心の習慣 *Habits of the Heart*』(1985年)、共著『善い社会 *The Good Society*』(1991年)などを書き著している。また、人類の進化と宗教の関係についても深い考察を行ったベラーは、2011年に大著 *Religion in Human Evolution: From*

the Paleolithic to the Axial Age (人類進化における宗教：旧石器時代から軸の時代まで) を刊行している。晩年は新自由主義的な市場主義に焦点を合わせ、本書で示されるような「グローバル市民社会における世界市民宗教」について論じた。87歳となっていた2013年7月30日に世界中の人々から惜しまれつつも、その生涯を閉じることとなった。

1. グローバル市民社会における宗教の役割

それではI章に収められた「グローバルな市民社会と市民宗教の可能性」の内容から見ていこう。先述したように、晩年のベラーが問題視したのは世界中を席卷する新自由主義的な市場主義であったといえる。ベラーの問題意識は次のようなものである。資本主義は人間の欲望を開花させ、新自由主義はそれを促進し、倫理的制約のない市場経済を招来する。そこでは利己主義が蔓延し、道徳は退廃して、様々な災禍が引き起こされかねない。このように考えるベラーは、それに対抗すべくグローバルな市民社会の倫理的連帯を訴える。その連帯の求心力となるべきものは「世界市民宗教」であり、これはベラーが一貫して論じ続けてきた「市民宗教」の拡張概念ないしグローバル・レベルでの適用とでもいえるだろう。この主張の意味するところを理解するために、準備作業としてまずはベラーのいう「市民宗教」の概念を確認することにしよう。

市民宗教とはなにか ——出発点としての「アメリカにおける市民宗教」

ベラーは1967年の論文「アメリカにおける市民宗教」のなかで、一見宗教性がないかのように見えるアメリカの公共的領域のなかに、多くのアメリカ人が共有している宗教的志向性の存在を指摘し、それが求心力となってアメリカの統一を支えていると論じた。この宗教的志向性をベラーは市民宗教 *civil religion* と呼んだ。その具体的な現れとしてアメリカ大統領の演説や、独立宣言に度々現れる「神 God」という言葉、そして大統領就任演説の際に聖書に手を乗せて宣誓を行うという宗教的儀礼などが挙げられている。このような市民宗教は特定の教義・宗派をもつものではなく、国家によって規定された国教

とは明らかに異なるものである。また、それは個々人の私的な宗教的志向に還元されるものでもない。これを公共哲学における「公-公共-私」の三元論（山脇，2014）に対応させるならば、ベラーのいう市民宗教は公的宗教である国教とも、私的宗教である個々人の内面の次元にとどまる信仰とも異なる、いわば公共的宗教とでもいえよう。

ベラーが提出した市民宗教の概念は賛否両論のさまざまな反応を生み、たとえばそのようなものは存在しないという批判や、国家による特定の宗教の押し付けではないかといった批判が寄せられた。ベラー自らも言っているように、市民宗教が大いに誤解を受けやすい概念であったことは確かである。そもそも市民宗教とはジャン＝ジャック・ルソーが『社会契約論』で用いた用語であり、ベラーはこの用語を借用する形で、しかしルソーとは異なる独自の意味を込めて市民宗教論を論じている。ルソーの市民宗教概念は国家による宗教の強制と解釈されてきた歴史があり、それゆえベラーがルソーと同様の批判を受けたのは理由のないことではなかった。

このような事情のため、ある段階からベラーは市民宗教という言葉を用いることはなくなった。しかし、それはベラーが市民宗教の概念を誤りだたと認めていることを意味するわけではない。ベラーは、たとえば『心の習慣』には市民宗教という語が見いだせないことを指摘しているが、続けて「しかし、ここでは同じ問題の多くについて別の用語で議論していた」という（本書4頁。以下特に断りがなければ頁数は本書のものを示す）。このことからわかるように、ベラーは一貫したパースペクティブのもとで市民宗教の問題を考え続けていたのである。そして、宮島喬が評価しているように、市民宗教は、戦前の日本における国家神道のような抑圧的な国家宗教とは全く異なる、アメリカ人にとっての絶えざる自己批判の基準であり、アメリカ建国者以来のアメリカの精神の表現であったのである（32頁）。

グローバルな連帯を可能にする世界市民宗教

以上のようにベラーの市民宗教概念について確認したところで、続いてI章

でベラーが論じた「世界市民宗教」の構想を見ていこう。ベラーは本書で「実現可能で首尾一貫したある種の世界秩序への到達」を表現した、世界市民宗教というアイデアを提出する(2頁)。これはベラーがアメリカの第三の試練と呼んだものの解決策として考えられたものであった。ベラーがいうアメリカの三つの試練とは、第一の試練がアメリカの独立(独立戦争)に、第二の試練は奴隷制の問題(南北戦争)に関わるものであり、第三の試練は「世界のなかのアメリカの位置づけに関係しており、どのような世界でアメリカがその位置を占めることになるのか」というものである。この第三の試練についてベラーが念頭に置いているのは、ベトナム戦争によって「道を踏みはずしてしまった」アメリカであり、ベラーは一貫してこれを批判している。グローバリゼーションが進展した今日において、人権の保護や、公正なグローバル経済、平和の実現などを可能にするためには、それを担保する倫理的価値がトランスナショナルに共有される必要がある。そのためには「トランスナショナルな主権」の出現が必要であり、グローバル金融危機に際して2011年に、グローバルな金融の動きを監視するためのトランスナショナルな制度の構築を、バチカンが呼びかけたことに、ベラーはその出現の一端を見ている。「実現可能で首尾一貫したある種の世界秩序」を創造するためには、グローバル市民社会が前提として必要とされており、ベラーはその現実的な基盤として国際連合や国際NGOの展開に期待を寄せている。したがって、宮島がいうようにベラーが求めているものは「トランスナショナルな主権を行使する『グローバルな市民社会』」といえる(40頁)。そして、これを実現するためには世界の宗教コミュニティの参加が不可欠であるという。

そもそもグローバルな市民社会というものはありえるのだろうか。この点に懐疑的な論者として、ベラーはマイケル・ウォルツァーを挙げる(6頁)。ベラーによれば、ウォルツァーは『道徳の厚みと広がり』のなかで、個人は必ず何らかのコミュニティに所属しており、またそれは個別的なものであって、人が人類全体の普遍的なコミュニティに所属することはこれまでなかったし、これからもないだろうといった趣旨の議論を展開しているという。ベラーは基本

的にウォルツァーの議論には好感を持っているが、この点については批判を行い、オリンピックやワールドカップなどのグローバルな祝祭や、グローバルな貿易・資本移動を支える法・規則・慣習などの存在を挙げてグローバルな市民社会・グローバルな統治の存在を示している。

そしてベラーは、市民社会がその成立の当初から原則的に国際的なものであったというアレハンドロ・コーラスの議論や、ユルゲン・ハーバーマスが『公共性の構造転換』で展開した公共圏論（ベラーは市民社会という語を公共圏と同義に用いている）などを引きながら（10-13頁）、なぜグローバルな連帯が困難なのかについて論じていく。ハーバーマスは「グローバルな市民社会とある種のグローバルな統治が可能かどうか」を問い（16頁）、そしてそれを可能にするものとして憲法愛国主義などに期待しているが、ベラーはこのような抽象的な原則では不十分であるという（21頁）。ベラーによれば、グローバルな連帯を可能にするために必要なものはある種の宗教性である。ベラーは人権についての思想がアメリカ合衆国憲法に取り入れられた経緯に、当時のプロテスタント諸派（おもにバプティストとクウェーカー）の働きが大きかったことを指摘して、このような「宗教的熱心さ」にグローバルな連帯を可能にする契機を見るのである（21-25頁）。

以上のことをやや図式的にまとめると次のようになるだろう。グローバルな連帯を求めるベラーは、「グローバルなもの」と個別なものとは相互に排他的である」と考えるウォルツァーとは異なり、むしろグローバルな連帯という問題意識を共有するハーバーマスに近い。しかし、抽象的な原則に基づく連帯には懐疑的である点でハーバーマスとは異なり、グローバルな連帯を可能にせしめるものとしての宗教性にベラーは期待するのである。

なお、I章に同時に収められた宮島喬の論考「世界市民宗教はいかに可能か」では、ベラーの学問的な歩みを俯瞰するかたちで議論が進められており、ロバート・ベラーの知的業績の簡潔な紹介として有益である。

2. 人類進化における宗教について

続いて、Ⅱ章の「進化・遊び・宗教——人類進化における宗教について」の議論を見ていくことにしよう。ベラーはここで生物進化とそれに対する宗教の位置について論じている。まずは進化論と、科学と宗教の対立について、具体的には神による設計 (design) 論、ダーウィンの『種の起源』や自然選択論、そしてリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』などの議論を確認した後 (46-53 頁)、このような生存に直接かわらない人間の行動の諸相について論じていく。そこでベラーが依拠するのは、生存圧力がかかる日常生活の世界は多くの現実のうちのひとつにすぎないとするアルフレッド・シュッツの多元的現実論である (54 頁)。ベラーは、生存のための功利主義的な打算に満ちた日常生活の世界に対して、「遊び」の世界を対置し、日常生活の心配事が取り払われたこの領域から宗教が生まれたという。Ⅰ章との関連でいえば、グローバルな市民宗教を構想するベラーが、人類の普遍的な経験としての「遊び」に宗教の起源を見たことは自然なことといえるだろう。

ベラーはオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』を引用しながら、遊びのなかから宗教が生まれたことを強調している (61 頁)。ホイジンガによれば、神話や祭祀の起源は遊びであり、そのような宗教における遊びの要素を認識した最初の偉大な思想家はプラトンであったという。そしてベラーは、ホイジンガによるプラトンの引用を多数紹介しながら、「遊ぶように生きる人」について論じていく。ベラーはプラトンの有名な「洞窟の比喩」について、アンドレア・ナイチンゲールの解釈を引きながら次のようにいう。人は鎖に繋がれた牢獄である暗い洞窟から解放されたとしても、確信もなく (アポリア)、居場所もない (アトポス)、「故郷喪失の状態」に置かれてしまい、結局のところ再び牢獄に自ら戻ることになる。しかし、哲学者となるべき人間は、たとえアポリアに陥り「異文化のなかに暮らす世捨て人」のようにけっして「安住する (at home)」ことはなくなるとしても、再び牢獄に戻ることはしない。牢獄から解放されて「日常生活の世界からも離脱し、一種の真

面目な遊びに没頭するような立場にある」この人は、最終的に公的領域に戻ってきて統治に関わることになるのである（64-69頁）。

この議論に関連させて奥村隆は、Ⅱ章に収められた論考「ベラー VS. ベラー——宗教をめぐるふたつの視点」のなかで、「共同体の外に立つ」という観点から、ベラーが「アメリカが生み出した普遍によって、アメリカを理解し、アメリカを批判する」という自己批判の姿勢をもち、このとき「洞窟の比喩」における「哲学者となるべき人」のように「共同体が奉ずる「普遍」によって共同体の外にはみ出てしまう」ものの、そのような位置から公共性を構想し、その批判原理によって「アメリカ国民の自己偶像化の危険を抑止する」という一貫した態度をとり続けていたことを高く評価している（84-89頁）。

また、ドイツのフライブルク大学、ハイデルベルク大学での講演録であるⅤ章「人類進化における宗教」も同一テーマを論じているため、Ⅱ章の議論との重複が見られるが、ここでその内容にも簡単に触れておこう。人類進化と宗教の関係を論じたⅡ章・Ⅴ章の論考は、島藺進によれば、「そのどちらにおいても遊びが強調され、儀礼と結び付けられ、そしてプラトン思想の称揚と関係づけられている」（221頁）。Ⅴ章の議論がⅡ章と異なる点は、宗教の起源として遊びの他に母子間の養育関係とそこから生じる血族関係、そしてこれらとは別に大規模な集団内で発生した順位制が挙げられていることである（191-94頁）。

なお、Ⅴ章にあわせて収められた島藺の論考「『進化』と超越界の自立性——ロバート・ベラーの宗教論の到達地点」では、ベラーがシュッツやギアツのように、日常生活世界と宗教的経験の世界を異なる次元として措定して「宗教」を理解しようとするのに対し、他方でタラル・アサドのように実践を重視する立場からは、キリスト教的な「宗教」と「世俗」の分類は宗教一般に関して妥当性をもたない、といった「宗教」の定義をめぐる議論がなされており、ベラーの宗教理解が宗教学の観点から位置づけられている。

3. 丸山眞男の比較ファシズム論

続いて、本書のⅣ章に収められた講演録「丸山眞男の比較ファシズム論」の

内容を見ていこう。ベラーは近代の「倫理的なプロジェクト」を支持し擁護しようとした論者として丸山眞男、ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラーらを取り上げ、彼らが擁護しようとした人権、民主主義、政治的平等といった価値について、いかにそれを擁護するのが困難であったか、またいまでも困難であるかを論じ、そして丸山が論じたファシズムをこれらの価値に敵対するものであったと位置づけている。

ベラーによれば、丸山は複数のファシズムに共通する特徴として「反革命」を指摘しているという(147頁)。丸山によればファシズムには特定の綱領もなければ、ヴィジョンも普遍主義的なものもない。それは反共産主義的であることによつてのみ定義されるものであるという。ベラーは、丸山がこのような反共産主義的メンタリティを複数のファシズムに共通するものとして見ていたとし、丸山のファシズム論を比較ファシズム論として論じている。丸山が論じたファシズムのケースは日本やドイツだけでなく、アメリカをも対象としており、これは丸山がアメリカのファシズムに何か奇妙に「日本的な」要素があると見ていたからではないかという(154頁)。その奇妙に「日本的な」要素とは、丸山が論じたところの特殊主義と超国家主義であり、すなわち、アメリカの極端な絶対化という批判原理の欠如である。かつてジョゼフ・マッカーシーはアメリカに蔓延する冷戦初期のヒステリックな時代風潮のなかで「赤狩り」を進めた。彼を批判するものは誰でも共産主義者のレッテルを免れず、当時のアイゼンハワー大統領や上院議員であったジョン・F・ケネディでさえ彼を批判することはなかった。このような自己批判の契機を失った社会は自らの極端な絶対化に陥り、丸山のいう「無法者」の台頭を許してしまう。これは今日のアメリカにおいても見られることであるとされ、たとえば2012年大統領選での共和党指名の大統領候補リック・サントラムが述べた「アメリカだけが世界で唯一よい社会である」といった言説に、ベラーはアメリカ例外主義(批判原理の欠如)をみとめるのである(160頁)。ベラーが一貫して強調してきたことは、例外主義に陥ることなく絶えざる自己批判によって自らを捉え直していくことであり、これはまさに丸山がファシズムを批判した際に強調したことであった。

なお、本書の第IV章には中島隆博による論考「日本はどこにいるのか」が収められており、このなかに講演で交わされた高田康成、趙星銀、井出健太郎の三名のコメンテーターとベラーの議論が採録されている（171-185頁）。

4. シンポジウムでの議論について

これまでグローバルな連帯とそれを可能にする世界市民宗教を論じたI章、人類進化と宗教の関係を論じたII・V章、日本の文脈に関して丸山を論じたIV章の内容を見てきた。ここでは、これらのベラーの関心領域を横断するように議論がかわされた立教大学でのシンポジウムの記録内容を紹介したい。

このシンポジウムはベラーがはじめに問題提起を行い、続いてコメンテーターである古矢旬、大澤真幸、ミラ・ゾンタークがそれを受けてコメントを行って、これにベラーが応答するという形式で進んだ。以下、ベラーの問題提起とそれに対するコメントの内容を見ていくことにする。

ベラーが行った問題提起は現代世界が直面する様々な問題に関するものである。具体的には環境問題、主たる強国で見られる指導層の麻痺、そして現代の景気後退が続くとどうなるかといった三つの問題が提起された（94-98頁）。また、ベラーは日本に対する問いかけとして、定量的な指標で世界各国に比べ圧倒的に優れている日本が、なぜ国際的に指導力を発揮できないのかと批判している。そしてベラーはアメリカについても「スーパーリッチ」の存在と富の極端な偏在を批判し、人生の目的は金持ちになることではないと強く訴えている。

このようなベラーの問題提起に対して、古矢は、物質的な豊かさの限界や持続可能性には「衰退」という問題が含まれていると指摘し、ベラーの提起を「いかに『ディーセントに』減んでいくか」として理解している。その上でアメリカの政治と宗教の問題、そして日本の敗北主義的メンタリティの二点についてコメントを行っている（103-108頁）。

ミラ・ゾンタークは、ベラーが言及した世界各国のランキングについて、そのような志向はもはや放棄すべきであること、そしてベラーの人類進化と宗教に関する議論に心理学や神経科学の観点が欠如していることを批判している

(117-121頁)。

大澤真幸は、主に「地球的規模のカタストロフの問題」と、「日本という問題」の二点についてコメントを行っている(108-117頁)。まず大澤は地球環境問題に代表される現代社会が直面する様々な問題には「未来の他者との連帯」、すなわち世代間の連帯の問題があることを指摘する。そして大澤は、ベラーが論じる市民宗教では世代間の連帯をつくり上げることは難しいのではないかと悲観的な見解を示している(111頁)。次に、大澤はこれまで日本が海外の先進文明を取り入れてきた際の特徴を、「拒絶的受容」という概念で言い表している(114頁)。これは、一応は受け入れるものの、それを自らのものとして全面的に内面化することはなく、あくまでも半分は外のものとして拒絶するあり方を指しており、例として「漢字とかなの使い分け」が挙げられている。このような受容パターンをもつ日本では、人権や民主主義といった西洋由来の概念はあくまでも外部的なものに留まり続けるのではないかと、といった指摘を行っている。

5. 若干のコメント

遊び・プラトン・軸の時代

以上、本書の内容について概観してきた。続いては、本書で展開されたベラーの議論に対して、評者から若干のコメントを行いたい。

まず、Ⅱ章で展開されたベラーの議論は、本書の記述からでは「遊び」が強調されているかのように見え、その意図が幾分不明瞭であると言わざるをえない。ベラーは宗教の起源を論じるにあたって人類進化からはじめ、続いて人類の普遍的経験である「遊び」に言及し、最後にプラトンに触れている。プラトンの議論はヨーロッパにおける理性の出発点でもあるが、それは合理的であると同時に超越的なものでもあった。

ところで、ベラーは2011年に刊行された大著 *Religion in Human Evolution: From the Paleolithic to the Axial Age* で、様々な宗教は類型化でき、それぞれの宗教類型は歴史上に宗教の進化過程として位置づけることが可能である、と

する宗教進化論を提示している（Bellah, 2011）。それとともに、ヤスパースが「軸の時代 Axial Age」と呼んだ、かつて普遍的な志向性をもつ宗教が、世界中で同時多発的に発生した時代に至るまでの歴史過程に、一貫した説明を与えようと試みている。

このことを踏まえるならば、ベラーがプラトンに言及したのは、その超越的な志向性の延長線上に、軸の時代の出現を位置づけているからだといえる。つまり、本書のⅡ章で展開された議論は、軸の時代のいわば前史として位置づけられることになる。しかし、本書のⅡ章では軸の時代の出現については議論されておらず、したがって、ベラーの議論全体を知るためには *Religion in Human Evolution* も合わせて読む必要がある。

人権は世界市民宗教の中核たりうるか

ベラーはⅠ章で世界市民宗教の概念を提示した。そして、その中核ないし基盤として据えられているのが人権であった。この点について評者は疑問を感じざるをえない。というのも、ベラーが市民宗教の概念を世に問うた「アメリカの市民宗教」で扱われていたのは実際にアメリカ社会の中に存在するものとしての市民宗教であり、その後用語の変遷はあったものの、『破られた契約』、『心の習慣』、『善い社会』などの著作群において一貫して同じ主題が扱われ続けた。私見ではその一連の著作で論じられた市民宗教概念は、人権のような世俗的な概念とは異なる宗教的次元に属するものであり、その意味で人権とは対置されて扱われてきたように思われる。このように論じてきたベラーが世界市民宗教の中核に人権を据えるのは、以前の議論との関係からみて意外な印象を受ける。ここで市民宗教と世界市民宗教の関係が問題となるが、それが本書の中で十分に説明されているとはいえない。おそらく、ベラーには市民宗教をグローバルに展開させたいという構想があり、ハーバーマスの議論に込めるようにしてグローバルな市民宗教（世界市民宗教）の概念を提示することになったものの、その段階ではあくまでも大きな方向性を素描するに留まり、概念の具体的な内実までは十分な明確化をなしえなかったのであろうと評者は考える。

グローバルな連帯における宗教の可能性

ベラーはグローバルな連帯を実現するために宗教の役割に期待しているが、本書の中で、宗教的熱心さは「つねに問題含み」であるとも述べている(22頁)。ベラーがこのようにいう理由の一つとして、かつてヨーロッパにおいてカトリックとプロテスタントの宗教対立から引き起こされた、宗教戦争の経験が考えられるだろう。

「真の宗教」をめぐる妥協のきかない対立から引き起こされた凄惨な宗教戦争は、その解決のために、ヨーロッパ思想史における「暫定協定 *Modus Vivendi*」としての寛容の精神を生み出した。そしてこの精神は、たとえば、現代正義論の文脈におけるリベラリズムの思想に息づいているといえる(Rawls, 2007)。一般に、リベラリズムには、法や正義に関する公的な決定において、道徳や宗教などの私的な価値観が影響することに反対する傾向がある。そうすることによって、様々な思想・信条・主義・主張をもつ人々が多元的に存在する現代社会にあって、人々が平和裏に共存・共生していくことが可能になる、とされるのである。

しかし、果たして人は、公的な決定において私的な価値を完全に排して考えたり、行動したりすることは可能なのだろうか。たとえば宗教を考えても、特定の信仰を持つ人にとって、それは価値判断の基盤であり、行動する際に拠って立つ価値規範に他ならない。それをいわば「棚上げ」して思考するということは実際の人間のあり方に即していないのではないか。とするならば、ベラーが本書において示した、宗教的なものから導かれた「人権」を核とするグローバルな連帯という方向性は、実際の人間の思考・行動様式に即したものであるといえるだろう。そして、宗教的なものからリベラルでも合意可能な価値である人権を導き出そうとした点についても、原理的な立場の違いを超え、両者を架橋する試みとして評価でき、その意義は大きいといえる。宮島がいうように「未完に終わった」(43頁)とはいえ、以上のように、ベラーが示した方向性は現代の諸問題、とりわけグローバルに展開する新自由主義的な市場社会の抱える問題を考えるにあたって大きな示唆を与えるものであった。

おわりに

ロバート・ベラーの逝去はまさに「巨星墜つ」という言葉で形容するに値する。人はそのような人物を失ったとき、あたかも羅針盤を失った旅人のような心細さを覚える。推測するに、丸山眞男の死に際してベラーも同様の気持ちであったのであろう。「丸山さんが生きていて、ここにいてくれればよいのと思う」という彼の言葉からもその心情はうかがえる。しかし、まさにベラーが「丸山さんはもういない。わたしたちは自分で進み続けなければならない」と語ったように、われわれもまたベラー亡き後の世界を自分で進み続けなければならないのだ（185頁）。現在の世界を見渡せば、人権という概念についてイスラーム世界やアジア諸国から特殊西洋的な概念であり受け入れがたいといった批判がなされている。また、IS（イスラム国）の存在は依然として脅威であり、2015年11月に起きた悲惨なパリ同時多発テロ事件は記憶に新しい。これを受けてフランスではナショナリズムの高揚と右派勢力の台頭の動きが見られ、IS（イスラム国）に対する武力攻撃の世論が高まっている。この動きは欧米を中心に波及的な効果をもたらすだろう。その一方で、東アジアでは歴史認識や領土紛争をめぐる対立状況が続き、いまだ解決の道は見えていない。現在の世界はベラーが望んだ世界的な連帯とは逆の方向に対立が深まっているように見える。さらなる問題として世界中を席卷する新自由主義や、環境問題、金融問題など、世界規模の問題群がますます困難な状況を極めつつある現在において、われわれはそれらに対処するための倫理的な連帯をいかにして作りだしていけるのだろうか。ロバート・ベラーの残した知的遺産は絶えず参照されるべき導きの糸としてわれわれに残されている。

（参考文献）

山脇直司（2004）『公共哲学とは何か』ちくま新書

Bellah, Robert（1967）“Civil Religion in America” in *Dædalus*, 96(1): 1-21

（河合秀和訳（1973）「アメリカの市民宗教」『社会変革と宗教倫理』未来社）

Bellah, Robert (2011) *Religion in Human Evolution: From the Paleolithic to the Axial Age*, The Belknap Press of Harvard University Press.

Rawls, John (2007) *Lectures on the History of Political Philosophy*, Samuel Freeman (ed.), Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.

(齋藤純一・佐藤正志・山岡龍一・谷澤正嗣・高山裕二・小田川大典訳 (2011) 『ロー
ルズ政治哲学史講義Ⅰ』岩波書店)

(ほしかわ りゅうのすけ)

(2016年2月8日受理)

※本稿は、地球福祉環境研究センターの「研究プロジェクト1 公共研究の展開(4)」に関わ
る研究成果である。(公共研究編集委員会)